

『ハムレット』3幕4場の the ‘engineer’ passageに関する一考察

辻 照 彦

はじめに

『ハムレット』3幕4場の the ‘engineer’ passageは、いわゆるクロゼット・シーンのほぼ最後に位置する9行からなるパッセージである。ハムレットはこの中で自分がイングランドに送られることについて触れて、クロードiasと学友ローゼンクランツとギルデンスターンが自分に何か罠を仕掛けようとしていることを疑い、対抗策を講じて彼らの裏をかくつもりだとガートルードの前で語る。このパッセージはThe Second Quarto (Q2)にのみ見られ、The First Folio (F)からは欠落している。

John Dover Wilsonは、このパッセージがFから欠落していることについて、ハムレットの台詞を節約したいという願望以外に、その理由を想像することはできないと述べて、劇場関係者によるカット (theatrical cut) と見なしている¹⁾。

他の研究者たちも、Dover Wilson同様、このパッセージをQ2へのアディションではなく、Fの基となったマニユスクリプトからカットされたものであると考えている。このパッセージについて最も注目すべき点は、このパッセージが『ハムレット』のテキストにある比較的長いQ2-only passageの中で、最も多くの研究者から、単なるFからのカットではなく、シェイクスピア自身による意図的なカット (authorial cut) と見なされてきたことである。すでに19世紀末にGeorge MacDonaldは、the ‘engineer’ passageがシェイクスピア自身によってカットされたとする考えを述べている。彼によると、このパッセージでは、ハムレットがローゼンクランツとギルデンスターンがその実行を委ねられた計略を予測しているように描かれている。しかし、シェイクスピアは4幕6場や5幕2場で、ハムレットの危機からの脱出を神の摂理によるものとして描いている。シェイクスピアは、ハムレットがローゼンクランツとギルデンスターンの裏をかき、彼らを罰する決意を表明しているthe ‘engineer’ passageが、5幕2場のハムレットの説明と矛盾することに気付いたのである、とMacDonaldは述べている²⁾。

G. R. Hibbardは、すべてのQ2-only passage をシェイクスピア自身によるカットと見なしているが、このパッセージについては、ハムレットからホレイショーとクロードiasに送られた手紙を完全に予測できないものにすることによって、4幕の展開にサスペンスとサプライズを与えることに貢献していると述べている³⁾。

Philip Edwardsは、the ‘engineer’ passageがFから欠落しているのは、シェイクスピア自身が劇の後半を改訂したからだと考えている。彼はその理由として the ‘engineer’ passageの次のような問題点を指摘している。まず、ハムレットは、ローゼンクランツと

ギルデンストーンがイングランドに同行することを知らず知らずと知られていないことである。まして、イングランドへの旅がハムレット殺害のために計画されたものであることは観客さえもまだ知らされていないとEdwardsは述べている。

2番目の問題点は、ハムレットが復讐という最大の任務を先延ばしにして、むしろ進んでイングランドに行こうとしており、クローディアスの計略の裏をかき、ローゼンクランツとギルデンストーンを殺すことを冷めた喜びと共に約束していることである。Edwardsは、ハムレットがこの時点で学友二人を殺す決意をしていることは、5幕2場冒頭のハムレットの説明と一致しないと指摘する。なぜなら、5幕2場のホレイショーに対する説明では、ローゼンクランツとギルデンストーンを船室に忍び込むというアイデアは突然ひらめいたものと説明されており、学友二人を殺すことになったのも、その衝動的な行動が発端となっているからである⁴⁾。

本論の目的は、まず、3幕4場の the 'engineer' passageを作者シェイクスピア自身による意図的なカットと見なす研究者たちによって指摘されてきたこのパッセージの問題点について検証することである。そして、シェイクスピアがイングランド計画と親書きき換えのエピソードをどのように描いているかを詳しく見ながら、the 'engineer' passageがその文脈の中でどのような機能を果たしているのかを考察してみたい。その際に、The First Quarto (Q 1)のテキストとSaxo GrammaticusやBelleforestによる原話の描写も参考にしていきたいと思う。

学友に対する不信感と対抗策

最初に the 'engineer' passage とその直前直後の表現を確認しておこう。3幕4場のクロゼット・シーン (the closet scene) の最後のところでハムレットは、自分が狂気を演じているだけであることをガートルードに告げて、それをクローディアスに知らせないように注意する。ガートルードがその心配は無用であると言うと、ハムレットは次のように続ける。Q 2にだけ見られる the 'engineer' passageを括弧に括り、3幕4場の最後まで引用することにする⁵⁾。

HAMLET

I must to England, you know that?

GERTRUDE

Alack,

I had forgot. 'Tis so concluded on.

HAMLET

[There's letters sealed, and my two schoolfellows,
Whom I will trust as I will adders fanged,
They bear the mandate. They must sweep my way
And marshal me to knavery. Let it work,
For 'tis the sport to have the engineer
Hoist with his own petar, an't shall go hard
But I will delve one yard below their mines

And blow them at the moon. Oh 'tis most sweet
When in one line two crafts directly meet.]
This man shall set me packing.
I'll lug the guts into the neighbour room.
Mother, good night. Indeed, this counselor
Is now most still, most secret, and most grave,
Who was in life a foolish prating knave.
Come sir, to draw toward an end with you.
Good night mother.

(3.4.201-18)

引用したthe 'engineer' passageに関して指摘されている問題点は大きく2つに分けることができる。1点目は、イングランド王に宛てた親書が封印されたというような、いわゆるクロードィアスによるイングランド計画の詳細をハムレットが語ることである。2点目は、学友二人が自分を罠に落とそうとしていることをハムレットが確信していて、それに対して対抗策を講じる決意を自信たっぷりに表明することである。このうち2点目の問題についてまず考えてみよう。

ハムレットは the 'engineer' passageの中で、'They must sweep my way / And marshal me to knavery' と述べている。この台詞の中の 'knavery' という単語に一部の研究者は注目している。ハムレットが5幕2場で親書書き換えの顛末を語る際に、自分をイングランド王に処刑させようとしたクロードィアスの企みを 'royal knavery' と表現しているからである。たとえば、作者改訂説論者の一人であるGrace Ippolitoは、3幕4場の the 'engineer' passageは、ハムレットが自分を 'knavery' へと導く手紙の存在とその内容についても、デンマークを離れる前に知っていたことを示唆していると述べている⁶⁾。

しかし、the 'engineer' passage 中の 'knavery' をそこまで具体的な内容を含むものではなく、もっと漠然とした計略、卑劣な罠と解釈してもよいのではないだろうか。実際、学友二人が自分を罠に陥れようとしているのではないかとハムレットが疑う場面は3幕4場の前後にもいくつか見られる。

たとえば、3幕2場のゴンザーゴ殺し上演直後に、王がひどく気分を害していることと、妃がハムレットを私室に呼んでいることをローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットに告げにやって来る場面がある。そこに役者たちがリコーダーを持って入場してくると、ハムレットはリコーダーを一本もらって、学友二人をわきに連れて行き、'Why do you go about to recover the wind of me, as if you would drive me into a toil?' (3.2.313-5) と言う。ここで使用されている 'toil' という単語はネットの意味で、動物を罠に陥れて捕えるイメージである。

ハムレットはリコーダーを吹いてみてくれとギルデンスターンにせがみ、彼が吹けないと言うと、'Tis as easy as lying' と辛らつなことを言って不信感を露わにする。そしてさらにリコーダーを吹くように迫り、ギルデンスターンが吹き方を知らないと言うと、ハムレットは音楽用語をちりばめて、'Sblood, do you think I am easier to be played on

than a pipe? Call me what instrument you will, though you can fret me, you cannot play upon me' (3.2.334-6)と言う。ハムレットは狂気を装っているが、彼がこの時点ですでにローゼンクランツとギルデンスターンに対して根深い不信感を抱いているように描かれていることは間違いないだろう。

このように、3幕4場の the 'engineer' passageより2つ前のシーンで、すでにハムレットは 'drive me into a toil' や 'play upon me' といった表現を使って、学友二人が自分を何か罠に陥れようとしていることを疑っていることを示しているのである。さらに観客は、3幕3場の最初のところで、イングランドへの同行を命じられた学友二人がクローディアスに大げさな追従の言葉を浴びせる場面も見ているので、ハムレットが学友二人に対する不信感を募らせていくことにはあまり抵抗を感じないかもしれない。

ハムレットは学友二人に対する不信感を3幕4場以降も示している。4幕2場でローゼンクランツとギルデンスターンはハムレットからポローニアスの死体のありかを聞き出すとするが、その時ハムレットは次のように答える。

HAMLET

Do not believe it.

ROSENCRANTZ

Believe what?

HAMLET

That I can keep your counsel and not mine own. Besides, to be demanded of a sponge, what replication should be made by the son of a king?

(4.2.9-13)

ハムレットはローゼンクランツに、'I can keep your counsel and not mine own' と思ってはいけなと言っている。この台詞は、多くの注釈者が指摘しているように、ハムレットが学友二人の秘密、すなわち、クローディアスの手先となって自分を罠に陥れようとしていることを知っていることをほのめかしている。また、引用した台詞の後でハムレットはローゼンクランツをスポンジ呼ばわりし、王の追従者は結局最後には王に上手く利用されるだけだと述べている。

以上のような流れを見てくると、3幕4場の the 'engineer' passageの中で、自分が突然イングランドに送られることを知ったハムレットが学友二人に対して強い不信感を示し、クローディアスと学友二人による何らかの計略を疑うことは、むしろ自然なことと言えるだろう⁷⁾。

学友二人が自分に罠を仕掛けようとしていることを確信しているハムレットは、次に the 'engineer' passageの中で、'Let it work, / For 'tis the sport to have the engineer / Hoist with his own petar, an't shall go hard / But I will delve one yard below their mines / And blow them at the moon' と述べて、対抗策を講じる決意を表明する。この台詞を問題にする批評家は、ハムレットがここで5幕2場で説明される仕返し、すなわち、学友二人を処刑にすることを明かしてしまっていると解釈するからである。しかし、この

台詞から、ハムレットがここで学友二人を文字通り殺害する計画を語っていると解釈する必要は必ずしもないだろう。この台詞の少し前の 'marshal me to knavery' という表現から始まった戦争の比喩が継続されているものと考えれば、具体的な計画は固まっているが、とにかく敵の計略の裏をかいて、最後には自分が勝利を収める決意を表明していると解釈することはそれほど不自然なことではないように思われる。countermineという単語はcounterplotという比喩的な意味で普通に使用されていたことを考えれば、ここでは、ハムレットが自分を包囲される城塞都市に例えて、あくまで敵の攻撃を阻止する決意を述べているだけだと考えればよいだろう⁸⁾。

このように見てくると、3幕4場の the 'engineer' passageについて指摘されてきた問題のうち、学友二人が自分を罠に陥れようとしていることをハムレットが確信していることと、それに対して断固対抗策をとる決意をハムレットが表明していることについては、極端な解釈をしない限り問題とはならず、前後のシーンの文脈から判断する限り、ハムレットがこの時点で語る内容として決して不自然なものではないことが分かる。

さらに、シェイクスピアはイングランド計画を描くに当たり、原話を巧みにアレンジして、ハムレットがこの時点でイングランド計画を疑いやすいように環境を整えているようにさえ思われる。Saxo Grammaticus やBelleforestによる原話では、狂人を装うハムレットの仮面を暴こうとする君主の計画が2つ失敗してからイングランド計画が持ち出される。1つ目は女を使って誘惑する計画であり、2つ目は忠実な家臣がハムレットと母親の会話を盗聴する計画である。これらはQ 2/Fバージョンのナナリー・シーン (the nunnery scene) とクロゼット・シーンに当たる。原話では、盗聴作戦が失敗した後に初めてイングランド計画が持ち出されるのである。

Q 2やFでは、ナナリー・シーンの直後にクロードィアスがイングランド計画を思いつき、ゴンザーゴ殺しの芝居の後に計画の実行を決定する場面が描かれている。そして、クロゼット・シーンの後で、最終的にハムレットがイングランド行きを宣告されるのである。このようなシェイクスピアのイングランド計画の描き方について、見方によれば、原話より少し前からイングランド計画の描写を開始しているにすぎないと思われるかもしれない。しかし、Q 2/Fバージョンにおいてイングランド計画の決定がクロゼット・シーンの前に移されていることには重要な意味があると思われる。そして、おそらく、そのように移動した理由は、原話とQ 2/Fバージョンに見られるクロゼット・シーンの微妙な違いに関係があるのではないかと推測される。

原話でもクロゼット・シーンは重要なエピソードとなっている。しかし、たとえばSaxo Grammaticusでは、妃自身もクロードィアスに当たるFeng (BelleforestではFengon) の家来が盗聴のために自分の私室に隠れていることを知らない。ハムレットは妃が部屋にやってくる前に部屋を点検し、スパイを見つけて殺し、死体を細かく切断して豚に食べさせて処分してしまう。Saxo Grammaticusでは、ハムレットがスパイを殺したという事実を妃が知っているかどうか曖昧になっている。Belleforestでは、妃はその事実を知っているが、他言しないと約束する。つまり、原話では、クロゼット・シーンの後にハムレットがスパイを殺したことはFengたちに明らかにならないし、スパイの死体も見つからないのである。それでも満足しないFengはハムレットをイングランドに派遣しようとする。原話のイングランド計画は、ハムレットに2度も巧みに罠からすり抜けられ

てしまったことに不安を募らせたFengが決断した3番目の罠なのである。このような展開の場合、クロゼット・シーンの後に突然イングランドに行くように命じられたハムレットがそれを怪しいと思うのは当然である。

それに対してQ2/Fバージョンでは、ハムレットはガートルードの目の前でポローニアスを殺す。ガートルードはクロゼット・シーンの直後にそれをクローディアスに告げ、死体もしばらくして発見される。つまり、クロゼット・シーンの後では、宮中のほぼ全員がポローニアスを殺した犯人を知っており、ハムレットは発狂した殺人犯と見なされているのである。この後に原話のようにイングランド計画を初めて持ち出すとどうなるだろうか。おそらく、クローディアスにとって、殺人犯のハムレットをひそかに国外に逃亡させるという好都合な状況が整いすぎてしまうだろう。そして、ハムレットがイングランド計画を疑うことにあまり真実味がなくなってしまうのではないだろうか。ハムレットにはそれを命じられるだけの落ち度が備わってしまっているし、クローディアスには、ハムレットを安全に逃亡させるための措置だという言い訳があまりにうまく成り立つからである。このような展開だと、ハムレットは完全にクローディアスのペースに乗せられてデンマークを去って行くような印象を与えることになるだろう。

ゴンザーゴ殺しの芝居の直後にイングランドへの派遣が決定されるなら状況は異なってくる。確かにハムレットは芝居の最中も挑発的な態度を見せているが、致命的な罪を犯してはいない。クローディアスは、ちょうどSaxo GrammaticusのFengのように、確固たる証拠はないけれども、ハムレットが自分の犯した罪のを知っており、自分を何か罠に陥れようとしているという不安に駆られるのである。そして、その不安から逃れるためにイングランド計画を即座に実行に移そうとする。ハムレットにとっては、この時点でイングランド行きを命じられることに対しては、クロゼット・シーンの後で命じられるよりもはるかに強い疑念を抱くことができる。逆に言えば、ここでイングランド計画の実行を命じることにより、クローディアスはハムレットにこの計画を疑い警戒する理由を与えてしまうのである。

このように見てくると、シェイクスピアがイングランド計画について、その着想、決定、そして実行といったシーンを、クロゼット・シーンを挟むような形で周到に配置していることが分かるだろう。このようなイングランド計画全体のアレンジを考慮に入れれば、クロゼット・シーンの最後のところでハムレットがイングランド計画を疑い、それに対して対抗策を講じることを誓うのはむしろ自然なことと言えるのではないだろうか⁹⁾。

イングランド計画に関する情報

次に、the ‘engineer’ passage に関して指摘されてきた問題の中で、ハムレットがイングランド計画について、その入手方法がテキスト上で説明されていない情報を語る点について考えてみよう。パッセージの最初のところで、ハムレットは ‘There’s letters sealed, and my two schoolfellows, / Whom I will trust as I will adders fanged, / They bear the mandate’ と述べている。確かに、3幕3場でクローディアスはローゼンクランツとギルデンスターンにハムレットに同行してイングランドに行くことを命じている。しかし、ハムレットがここで語っているのは学友二人の同行についてだけではない。ハムレットは、

親書が封印されたこと、その親書にはイングランド王に宛てた何か命令（'mandate'）が書かれていること、そして、その親書を学友二人が持っていくことも語っている。たった3行だが、ハムレットの台詞にはイングランド計画に関する重要な情報が含まれているのである。

そもそもイングランド計画に関する情報は作品中でどのように提供されているのだろうか。まず、3幕4場までのところで、イングランド計画へのどのような言及があるかを少し詳しく見てみよう。先に述べたように、シェイクスピアはクローディアスに、原話より早い段階から、ハムレットをイングランドに送るイングランド計画に言及させている。クローディアスが初めてイングランド計画に言及するのは3幕1場のいわゆるナナリー・シーンの最後である。ポローニウスと共にハムレットとオフィーリアのやり取りを盗み見たクローディアスは、ハムレットの狂気がオフィーリアに対する恋愛感情に起因していないことを確信して、次のようにポローニウスにイングランド計画を説明する。

There's something in his soul
O'er which his melancholy sits on brood,
And I do doubt the hatch and the disclose
Will be some danger; which for to prevent,
I have in quick determination
Thus set it down: he shall with speed to England
For the demand of our neglected tribute.
Haply the seas, and countries different,
With variable objects, shall expel
This something-settled matter in his heart,
Whereon his brains still beating puts him thus
From fashion of himself. What think you on't?
(3.1.158-69)

引用から分かるように、この時点で、イングランド計画はまだほんの思いつき程度にすぎないと言ってよい。確かに、クローディアスは派遣の目的を滞納されている租税の要求にしようと述べて、具体的な説明もしている。しかし、最後にポローニアスの意見を尋ねていることから分かるように、イングランド計画についてはまだ最終決定からは程遠い段階にあることが分かる。

この計画に対する意見を求められたポローニウスは、ハムレットが上演する予定の芝居を観た後で、まず母親のガートルードから息子に悩みの原因を厳しく問いただしてもらい、二人のやり取りを自分が盗み聞きするという計略を提案する。そして、それでも原因が分からなければ、ハムレットをイングランドに送るなり、適当なところに監禁するなり、好きなようにすればよいとポローニウスはアドバイスする。それに対して、クローディアスは、'It shall be so' と言って、ポローニアスのアドバイスを受け入れる。もし、このまま事態が進んでいけば、イングランド計画を思いついた時点は少し早めに描かれているとしても、Q2/Fバージョンでも、最終的にイングランド計画が決定されるのはクロゼット・

シーンの直後ということになり、イングランド計画全体の流れは原話に近いものになっていただろう。

しかし、3幕2場でゴンザーゴ殺しの芝居を観せられたクロードィアスは、自分が兄の先王ハムレットを毒殺したことをハムレットが知っていることと、甥が叔父を毒殺するという芝居の筋書きから、ハムレットが復讐のために自分の命を狙っていることを確信して、イングランド計画を即座に実行に移そうとする。

ポローニアスは、3幕2場の最後のところで、ガートルードが待っているのので、彼女の私室にすぐに向かうようにハムレットに告げて、私室で二人の会話を盗み聞きする計画を実行に移す。しかし、クロードィアスは、クロゼット・シーンが始まる前の3幕3場の冒頭で、ローゼンクランツとギルデンスターンに向かって次のように命令する。この箇所は、イングランド計画への2度目の言及である。

I like him not, nor stands it safe with us
To let his madness range. Therefore prepare you:
I your commission will forthwith dispatch,
And he to England shall along with you.
The terms of our estate may not endure
Hazard so near us as doth hourly grow
Out of his brows.

(3.3.1-7)

ここで観客は、ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットに同行してイングランドに行くことを知る。クロードィアスは‘your commission’をすぐに用意するつもりだと言っている。この表現が何を意味するのかはあまりはっきりしない。ハムレットが後に書き換えることになるイングランド王に宛てた親書は、5幕3場で‘royal commission’と呼ばれているので、クロードィアスはここでその親書のことを言っているのかもしれない。あるいは、クロードィアスは、ローゼンクランツとギルデンスターンの任務を書いた委任状のような書類のことを言っているのかもしれない。観客にとっても、その具体的なイメージはこの台詞だけでは判断できないだろう¹⁰⁾。

ローゼンクランツとギルデンスターンが、国王一人の命に多数の国民の命と安寧がかかっていることを大げさな比喩を使って強調してクロードィアスの計画を称賛すると、クロードィアスは再度二人に急いで準備をするよう命じ、ローゼンクランツとギルデンスターンは退場する。

この後に3幕4場のクロゼット・シーンが始まる。クロゼット・シーンの最後のところでハムレットは、自分がイングランドに行かなければならないと語る。それに対してガートルードは、‘Tis so concluded on’ と答えて、自分もイングランド計画が最終決定されたことを知っていることを明らかにする。この部分はQ 2 / F 共通の部分である。そして、その後でハムレットは‘There’s letters sealed, and my two schoolfellows, / Whom I will trust as I will adders fanged, / They bear the mandate’ と述べるのである。この時点までに観客に明らかにされていたのは、ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレット

に同行していくことと、クローディアスが彼らに与える何か書類を準備する手はずになっているということだった。しかし、ハムレットはここで、手紙が封印されたこと、その手紙にはイングランド王に対する命令が書かれていること、さらに、それを学友二人が持っていくことを語るのである。これまで提供されてきた情報に比べて、ハムレットの台詞に含まれている情報はより新しくかつ具体的なのである。

確かに、ここまでの流れを見てくると、ここでハムレットが語る情報は、ハムレットがどのように入手したのかテキスト上で説明されていない内容が含まれているという点で不適切と言えるかもしれない。しかし、その議論に従えば、直前のQ 2/F 共通部分で、ハムレットがイングランドへ行かなければならなくなったことを語り、ガートルードが、それが最終決定されたと言語部分も不適切と言わなければならないだろう。イングランド計画が最終決定されたことを二人が説明されるシーンはやはりテキスト上に存在しないからである。

次に、3幕4場を過ぎてからイングランド計画がどのように描かれているかを見てみよう。クロゼット・シーンを過ぎて最初にイングランド計画への言及が見られるのは、そのシーンの直後の4幕1場である。ハムレットの行為にショックを受けて、ため息をついて悲しんでいるガートルードのもとにクローディアスがやって来ると、ガートルードは、ハムレットが壁掛けの後ろに隠れていたポーニウスを刺殺したことを告げる。それを聞いたクローディアスは次のように言う。

Oh Gertrude, come away!
The sun no sooner shall the mountains touch
But we will ship him hence, and this vile deed
We must with all our majesty and skill
Both countenance and excuse. Ho, Guildenstern!
(4.1.28-32)

クローディアスは3幕3場でも、ハムレットをなるべく早くイングランドに向けて出発させたがっていたが、ここでも、一刻も早くハムレットを出発させたがっているクローディアスの焦りのようなものが強調されている。このクローディアスの台詞で注意したいのは、クローディアスはガートルードに対して、イングランド王に宛てた親書のこと、ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットに同行することも告げていないことである。

次にイングランド計画への言及が見られるのは4幕3場の最終宣告の場面である。ローゼンクランツとギルデンスターンらに身柄を拘束されたハムレットが王の前に連れてこられると、クローディアスは次のようにイングランド行きを宣告する。

Hamlet, this deed, for thine especial safety,
Which we do tender, as we dearly grieve
For that which thou hast done, must send thee hence
With fiery quickness. Therefore prepare thyself.
The bark is ready and the wind at help,

Th'associates tend, and everything is bent
For England.

(4.3.37-43)

ここでクローディアスは、イングランド行きの用意がすべて整っていることと、一刻も早く出発しなくてはならないことを強調している。しかし、ここで注意したいのは、クローディアスは、この最終宣告の場面でも、イングランド計画についてあまり詳しいことを語らないことである。クローディアスはここで、イングランド王にあてた親書のことも、それをローゼンクランツとギルデンスターンが届けることも説明していない。

さらに、ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットに同行することも、この台詞からはあまりはっきりしないように思われる。‘Th’associates tend’ という表現があるが、この随行者がローゼンクランツとギルデンスターンの二人を指すのかどうかは曖昧である。随行者が待っているのは、港か、少なくともどこか部屋の外と考えられるが、ローゼンクランツとギルデンスターンはこの時、舞台上にいるからである。

1幕3場に少し類似した場面がある。ポローニアスはそこでフランスに旅立つレアティーズに向かって、‘Aboard, aboard for shame! / The wind sits in the shoulder of your sail, / And you are stayed for’ (1.3.55-7)と言って乗船を促す。その後、ポローニアスは社交術に関して長広舌を振るって、再度、‘The time invites you. Go, your servants tend’ (1.3.83)とレアティーズに乗船を促す。この場面では、舞台上にポローニアスとレアティーズ、そしてオフィーリアしかいない。当然、ポローニアスが待っていると言っている召使は港か、少なくとも家の外で待っているのである。

クローディアスが言っている ‘Th’associates’ も港で待っている何人かの随行者を指しているのかもしれない。もっとも、‘tend’ という動詞を「用意ができている」という意味に解釈すれば、舞台上のローゼンクランツとギルデンスターンを指すことになるのかもしれない。しかし、その場合でも、クローディアスは、ローゼンクランツとギルデンスターンがイングランドに同行することを、我々が思っているほどははっきりとハムレットに告げてはいないのである。

ハムレットは、前もって知らなかったとすれば、ここで、その随行者とは誰のことかと質問してもよさそうなものである。しかし、ハムレットは ‘Come, for England’ と言って退場する。ハムレットも、まるで随行者についてはすでに知っているように描かれているのである。これは、ハムレットが、クロゼット・シーンの時点で学友二人が同行することを知っているのであれば当然のことである¹¹⁾。

クローディアスは、ハムレットが退場すると、‘Away, for everything is sealed and done / That else leans on th’affair. Pray you make haste’ と言って、ローゼンクランツやギルデンスターンたちにハムレットの後を追うように命じる¹²⁾。そして、クローディアスは自分以外の全員が退場してから次のように語る。クローディアスがイングランド計画に言及するのはこの独白が最後である。

And England, if my love thou hold’st at aught,
As my great power thereof may give thee sense,

Since yet thy cicatrice looks raw and red
After the Danish sword, and thy free awe
Pays homage to us – thou mayst not coldly set
Our sovereign process, which imports at full,
By letters congruing to that effect,
The present death of Hamlet. Do it England,
For like the hectic in my blood he rages,
And thou must cure me. Till I know 'tis done,
Howe'er my haps, my joys were ne'er begun.
(4.3.54-64)

3幕4場の the 'engineer' passage以降、イングランド計画に関する具体的な説明はほとんどなかったが、最後に、クローディアスは独白の中で、イングランド王に宛てた手紙の恐ろしい内容を明らかにしている。ここで興味深いのは、クローディアスが、イングランド王に対する命令（'process'）の具体的な中身だけでなく、それが手紙に書かれていることをわざわざ説明している点である。'process' を令状の意味に解釈すると、クローディアスは令状と手紙の2種類の書類をイングランド王に送ったようにも解釈できるので、編集者に混乱を引き起こすことがありうる。たとえば Lewis Theobaldは、'If the "letters," importing the tenour of the process, were to *that* effect, they were certainly congruing; but of no great use, when the sovereign process imported the *same* thing. Now a process might import a command, and letters *conjuring* a compliance with it be sent, and be of great efficacy, where the execution of the command was to be doubted of' と述べて、ハムレットの処刑を命じた命令書と、それを補強するための手紙が存在したと解釈している¹³⁾。Theobaldは、クローディアスの独白の中に使用されているQ2の 'congruing' という単語に対してFの 'conjuring' を擁護しようとしているのだろうが、やはりここでは、'process' と 'letters' は、実質的に同じものと考えべきだろう。ちょうど the 'engineer' passageの中の 'mandate' と 'letters' の関係と同じである。

ここまで、シェイクスピアがどのようにイングランド計画を描いているかを詳しく見てきた。その結果、クローディアスは、4幕3場の独白を除くと、イングランド計画についてあまり詳しい説明をしていないことが分かった。ローゼンクランツとギルデンスターンがハムレットに同行することについては、3幕3場で二人に命令する場面がある。しかし、クローディアスは二人が同行することについてガートルードにはまったく伝えていないし、ハムレットにもはっきりと説明していない。イングランド王に宛てた親書に関しては、ハムレットやガートルードにはもちろん、親書の携行者となるはずのローゼンクランツとギルデンスターンにさえ、我々が思っているほど、はっきりと説明していないのである。

以上のようにイングランド計画についての言及を概観すると、3幕4場の the 'engineer' passageが、コンパクトながら、いかに重要な情報を提供しているかがよくわかる。このパッセージの中でハムレットは、まるで、クローディアスの節約的な説明を補うかのように、イングランド王に宛てた親書の用意ができたこと、親書にはイングランド王への命令が書かれていること、そして、学友二人がその親書を携行することをはっきり

と語るのである。これらの情報は5幕2場で説明される親書書き換えのエピソードと大いに関係する情報ばかりである。一部の批評家は、ハムレットがこれらの情報を知っていることは、5幕2場でハムレットが語る親書書き換えの説明と矛盾していると主張している。はたしてそのような指摘は本当に当てはまるのだろうか。それを判断するために、5幕2場で親書書き換えのエピソードがどのように説明されているかを次に見てみることにしよう。

親書書き換えの説明

ハムレットが学友たちとイングランドに向けてデンマークを出発してから海上で起きた出来事については、4幕6場でホレイシヨがハムレットから届いた手紙を読む場面と、5幕2場冒頭でハムレットがホレイシヨに説明する場面で語られる。親書書き換えのエピソードは5幕2場の説明の中に出てくる。

5幕2場の説明を見る前に、まず、親書書き換えのエピソードが原話でどのように描かれているかを参考のために見ておくことにしよう。原話では、イングランド計画を知ったハムレットは、ちょうど1年後に必ず帰国するので、その時に自分の葬儀を行うように母親に頼み、イングランドに向けて出発する。Saxo Grammaticusでは、親書を書き換えた時の様子が次のように描写されている¹⁴⁾。

Two retainers of Feng then accompanied him, bearing a letter graven on wood – a kind of writing material frequent in old times; this letter enjoined the king of the Britons to put to death the youth who was sent over to him. While they were reposing, Amleth searched their coffers, found the letter, and read the instructions therein. Whereupon he erased all the writing on the surface, substituted fresh characters, and so, changing the purport of the instructions, shifted his own doom upon his companions.

Belleforestでもこのあたりの説明は基本的に同じである。原話ではこのように、親書書き換えのエピソードは極めて簡単に説明されている。

シェイクスピアは親書書き換えのエピソードについて、基本的に原話に忠実に従っている。5幕2場の冒頭でハムレットは、イングランドに向けて出発したものの不安のために夜眠ることができず、衝動的に学友二人の部屋に忍び込んだことを次のようにホレイシヨに説明する。

Up from my cabin,
My sea-gown scarfed about me, in the dark
Groped I to find out them, had my desire,
Fingered their packet, and in fine withdrew
To mine own room again, making so bold,
My fears forgetting manners, to unseal

Their grand commission; where I found, Horatio –
O royal knavery! – an exact command,
Larded with many several sorts of reasons,
Importing Denmark's health, and England's too,
With ho! such bugs and goblins in my life,
That on the supervise, no leisure bated,
No, not to stay the grinding of the axe,
My head should be struck off.

(5.2.12-25)

ハムレットの親書書き換えの説明で注意したいのは、ハムレットが、船上で初めて親書の存在を知ったとは言っていないことである。引用の説明から判断する限り、ハムレットは最初から親書が目的で学友二人の部屋に向かったと考えられる。というのも、ハムレットは親書を見つけたとさえ言っておらず、ただ親書を盗んだと言っているだけだからである。Ioppoloは、5幕2場の説明は、ハムレットが手紙については船上で初めて知ったことを示唆していると述べているが、この解釈はQ 2/F 共通テキストの説明とは明らかに異なっている¹⁵⁾。

参考までにQ 1の説明を見てみよう。Q 1では、ホレイショーは親書書き換えの顛末を手紙によって知らされたことになっており、さらに、彼がそれを妃に語るという設定になっている。ホレイショーは次のように妃に説明している¹⁶⁾。

Being crossed by the contention of the winds,
He found the packet sent to the king of England,
Wherein he saw himself betrayed to death,
As at his next conversing with your grace
He will relate the circumstance at full.

(14.5-9)

このホレイショーの説明だと、ハムレットは船上で偶然親書を発見したように解釈できないこともないかもしれない。しかし、Q 1の説明とは対照的に、Q 2やFの説明では、親書発見に偶然性を挟む余地はまったくないように思われる。ハムレットは最初から親書を狙って二人の部屋に忍び込んだのである。

Saxo GrammaticusやBelleforestの原話においても、ハムレットは船上で偶然に親書の存在を知ったようには描かれていない。ハムレットは二人が親書を持っていることは前もって知っていて、それを二人の間を見て読むのである。Saxo Grammaticusで、'While they were reposing, Amleth searched their coffers, found the letter, and read the instructions therein' と描写されていることからそれは明らかだろう。

船上で、天の配剤によりハムレットが親書の存在自体を知ったという解釈は、一部の批評家が主張しているにもかかわらず、明らかにテキストの説明とは合致しないものである。5幕2場のハムレットの説明において、天の配剤が強調されていることは確かである。し

かし、ハムレットがここで天の配剤に感謝しているのは、ただ当てもなく学友の部屋に忍び込んだところイングランド王宛ての親書を偶然発見したということに対してではない。ハムレットが感謝しているのは、衝動的に二人の部屋に侵入したところ、二人に気付かれずに親書を盗み出すことができたことと、そっくりな偽の親書を作り、それを元の場所に戻すことができたことに対してなのである。そして、船上でハムレットを驚かせたのは、親書の存在自体ではなく、親書の中身、つまりハムレットを処刑せよというイングランド王への命令なのである。

このような5幕2場のハムレットの説明から判断すると、ハムレットは乗船前から、少なくともイングランド王に宛てた親書の存在と、それを学友二人が保管しているということについて知っていると考えの方が自然だろう。そうすると、the 'engineer' passageは5幕2場の説明と決して矛盾しておらず、単に5幕2場で語られるハムレットの行動の前提となる情報を提供しているにすぎないことになるだろう。

ここで参考までに、Q1のテキストで、イングランド計画がどのように説明されているかを見てみることにしよう。Q1では、Fと同様、the 'engineer' passageが欠落しているだけでなく、イングランド計画についての言及がQ2やFよりも全体的に少なくなっている。また、Q1において王が初めてイングランド計画に言及するのは、原話と同様、クロゼット・シーンの直後である。王は妃Gertredからポローニアスに当たるCorambisが殺されたことを聞かされると次のように語る。

Gertred, your son shall presently to England.
His shipping is already furnished,
And we have sent by Rossencraft and Gilderstone
Our letters to our dear brother of England
For Hamlet's welfare and his happiness.
Haply the air and climate of the country
May please him better than his native home.
See where he comes.

(11.115-22)

このシーンはQ2/Fの4幕1場と4幕3場を合成したような場面である。Q1の王は、ここで初めてイングランド計画に言及する。それにもかかわらず、船の準備はすでに整っているので、イングランド計画の描写は明らかにこのあたりで少し破綻している。しかし、その一方で、王は妃に、ハムレットの学友二人がイングランドに同行することと、彼らがイングランド王に宛てた親書を携えていくことをはっきりと説明している。Q2やFでは、クロディアスはこのような情報をガートルードに直接伝えてはいなかった。

上の引用の直後に、学友二人がハムレットを連れてくる。王はハムレットから、Corambisの死体がロビーにあることを聞き出すと、その搜索を学友二人に命じる。そして王は次のようにハムレットにイングランド行きを宣告する。

Well, son Hamlet, we in care of you,

But specially in tender preservation
Of your health – the which we prize
Even as our proper self – it is our mind
You forthwith go for England. The wind sits fair,
You shall aboard tonight. Lord Rossencraft
And Gilderstone shall go along with you.

(11.141-7)

王が、イングランドへの派遣をハムレットのために考えられた措置であることを強調しているのはQ 2やFと同じである。しかし、ここで王はハムレットに、学友二人がイングランドに同行することをはっきりと伝えているのである。

Q 1では、Q 2/Fバージョンに見られるイングランド計画のより繊細なアレンジは完全に台無しにされてしまっている。しかし、少なくともQ 1は、ハムレットがイングランドに向けて旅立つ前に、後の親書書き換えのエピソードとの兼ね合いで、どのような情報を知っている必要があるかについては配慮しているように思われる。もちろん王は親書についてハムレットに直接語ってはいない。しかし、王は妃といういわば第三者に、イングランド王にあてた親書の存在と、ハムレットの学友二人がその携行者として任命されていることをはっきりと語っている。王はこの情報を特に秘密にしたがっているような様子を見せていないし、肝心の親書の中身については、Q 2/Fと同じように、このシーンの最後の独白で語るなのである。このことから、王が妃に語っている内容は、おそらくハムレットを含め、宮中全体がすぐに共有することになるオープンな情報であるとみなしてよいだろう。このように見てくると、Q 1では the 'engineer' passage がカットされているにもかかわらず、そのパッセージに含まれていた親書書き換えに関わる重要な情報については、ハムレットが出国する前に別の形で、観客と登場人物にはっきりと説明されていることが分かる。

先に見たように、Q 2やFでは、クロゼット・シーンを過ぎるとイングランド計画の具体的な説明はほとんど見られない。シェイクスピアは3幕4場を過ぎると、クローディアスにも他の登場人物にもイングランド計画の詳細についてほとんど語らせていなかった。このことを考えると、ハムレットが親書と親書の携行者について語る the 'engineer' passageは、後の親書書き換えというエピソードを成立させるために不可欠な情報を観客に提供するという意味で、非常に重要な機能を果たしていると言えるのではないだろうか。

確かに、ハムレットが3幕4場の最後の時点でイングランド計画の詳細な情報を知っていることには、その入手の過程がテキスト上で説明されていない問題や、舞台上の時間の流れを考えれば、そもそもその情報を入手する時間的余裕が存在するのかという問題がある。しかし、シェイクスピアがQ 2の3幕4場でハムレットに親書とその携行者について語らせているのは、一部の批評家が主張しているように、うっかり筆を滑らしてしまった結果ではないだろう。シェイクスピアはここで、5幕2場の親書書き換えの説明との整合性を意識して、意図的に、そして、慎重に、親書の中身を除いて、可能な限りイングランド計画の詳しい情報をハムレットに語らせているように思われるのである。

むすび

はじめに述べたように、『ハムレット』3幕4場の the ‘engineer’ passageは、FをQ2の改訂版と見なす作者改訂説論者たちによって、その重要な根拠の一つとされてきたパッセージである¹⁷⁾。Ioppoloは、シェイクスピアが創作中に意図を変更したためにQ2バージョンには矛盾が生じ、それを解消するためにシェイクスピアは the ‘engineer’ passageを削除したと主張している。つまり、3幕4場のハムレットの発言は、彼が、自分を ‘knavery’ へと導く手紙の存在とその内容についてもデンマークを離れる前に知っていたことを示唆しているが、5幕2場の説明は、ハムレットが手紙については船上で初めて知ったことを示唆しているというのである。

Ioppoloは、シェイクスピアは3幕4場を書いている時に5幕2場の展開についてまだプランができていなかったのかもしれないし、ローゼンクランツとギルデンスターンの裏切りというサブプロットをどのように進めていくかはっきりしていなかったのかもしれないと推測している。しかし、いずれにしても、Fテキストでは、the ‘engineer’ passageを印刷しないことで、この矛盾（彼女はこれを duplication と呼んでいる）が除去されており、Q1でも、ハムレットはクロゼット・シーンで親書に言及していないので矛盾が生じていないと述べている¹⁸⁾。

先に見たように、クロードディアスのイングランド計画はハムレットの親書書き換えのエピソードと一体のものである。シェイクスピアは、親書書き換えという結末を意識して、3幕4場を含むイングランド計画を描いているのであり、結末が未定の状態で、とりあえずイングランド計画を描いているわけではないのである。シェイクスピアは、5幕2場で説明される親書書き換えの前提として、ハムレットがデンマークを出発する前に、親書と親書の携行者について知っていることをどこかで説明しなければならないことを意識していたはずである。あくまでイングランド計画と親書書き換えは一体のエピソードなのである。

シェイクスピアは、クロゼット・シーンでハムレットとガートルードにイングランド計画について語らせることによって、それがすでに宮中全体に周知の事実であることを示したかったのかもしれない。もちろん、ハムレットが誰かからそれを直接告げられるシーンがあればより整合性が確保されるのかもしれない¹⁹⁾。しかし、シェイクスピアはそのシーンを節約し、ハムレットにいわばナレーターのような役割も兼ねさせて、親書書き換えのエピソードに関わる重要な情報を観客に提供すると同時に、自分がその情報を知っていることも観客に伝えようとしているのではないだろうか。

改めてクロードディアスの4幕3場最後の独白を見てみると、シェイクスピアが親書に関する情報にいかん気を使っているかが分かるように思われる。この独白の目的は、ハムレットを到着次第処刑せよというイングランド王に宛てた命令を観客に明らかにすることである。しかし、ここでクロードディアスは、わざわざそれが手紙に書かれていることを説明している。4幕3場以前でイングランド計画に関して手紙 (letters) という単語を使っているのは、ここのクロードディアスと the ‘engineer’ passageを語るハムレットだけである。このことを考えると、シェイクスピアは5幕2場の親書書き換えの説明を強く意識して、ライバル二人の口から意図的にイングランド計画に関する最も重要な情報を直接提供させ

ているのではないかとさえ思われてくるのである。

Edwardsは、the 'engineer' passageを削除することがどのような効果をもたらすかという問題に触れて、このパッセージをカットすることによって生じるFハムレットの沈黙は、かえってハムレットが何を考えているかについて我々に様々な可能性を想起させ、さらに、5幕2場でハムレットがホレイシヨールにする説明に、より重要性を与えることになると主張している²⁰⁾。確かにそのような効果があるのかもしれない。しかし、イングランド計画に関する情報という点ではまた別の問題を生むことになるのではないだろうか。

先に見たように、クロードアスはイングランド計画についてあまり詳しい情報を提供していないので、the 'engineer' passageがカットされているFでは、イングランド計画全般に関する情報はより一層乏しくなる。Fのテキストから判断する限り、ハムレットは親書についても親書の携行者についてもまったく知らないままにデンマークを出国する可能性も出てくる。しかし、ハムレットは親書書き換えのエピソードについて、最初から親書を狙って学友二人の部屋に忍び込んだように説明しており、この点についてはFもQ2も共通である。Fバージョンのハムレットは親書の存在や学友二人がそれを保管していることをいつどこで知ったのだろうか。見方によっては、the 'engineer' passageをカットすることによりFバージョンが解決したように見えた問題は、決して解決されていないと考えることもできるのである。

注

- 1) John Dover Wilson, *The Manuscript of Shakespeare's 'Hamlet' and the Problems of Its Transmission*, vol. 1 (Cambridge: Cambridge University Press, 1934; reprint, 1963), 28.
- 2) George MacDonald, ed., *The Tragedie of Hamlet, Prince of Denmarke: A Study with the Text of the Folio of 1623* (London: Longmans, Green, and Co., 1885), 181.
- 3) G. R. Hibbard, ed., *Hamlet*, The Oxford Shakespeare (Oxford: Oxford University Press, 1987), 361.
- 4) Philip Edwards, ed., *Hamlet*, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), 14-9.
- 5) *Hamlet*からの引用とact-scene-line numberingは原則、Philip Edwards編集The New Cambridge Shakespeare版に拠る。
- 6) Grace Ioppolo, *Revising Shakespeare* (Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1991), 139-40.
- 7) ハムレットが具体的に何を疑っているかは分からない。しかし、シェイクスピアはポローニアスに、ハムレットをイングランドに送るなり、どこか適当なところに監禁してもよいと語らせたり (3.1.180-1)、クロードアスにも、ローゼンクランツとギルデンスターンに渡英の準備を命じる時に、'we will fetters put about this fear / Which now goes too free-footed' (3.3.25-6) と語らせているので、観客はこの時点で、ハムレットのイングランドへの永久追放や幽閉を想像することを期待されているのかもしれない。
- 8) Belleforestによる原話においても、クロゼット・シーンに当たる場面の最後で、敵の計略の裏をかいて、敵を敵自身が仕掛けた罠に陥れる決意をハムレットは表明している。
- 9) Alan Stewartは、大使を派遣する時は、王から任務について文書や口頭で時間をかけ

- て丁寧の説明されるのが普通であることを指摘した上で、ハムレットが派遣される時には、公式の会見も、個人的な指示も、命令書も与えられず、彼が読むことのできない封印された手紙が存在するだけであることから、ハムレットがすぐに王とローゼンクランツとギルデンスターンの計略を疑うのも驚くにあたらないと述べている。Allan Stewart, *Shakespeare's Letters* (New York: Oxford University Press, 2008), 268-9.
- 10) たとえば、George Lyman Kittredgeは、クローディアスがイングランド王に宛てた親書の中身を明かす4幕3場66行目の‘letters’に注釈をつけて、‘This sealed mandate to the English king is quite distinct from the “commission” given to Rosencrantz and Guildenstern (iii, 3, 3). Its contents are a secret. Their commission gives them custody of the mandate and of Hamlet and directs them to deliver it and him. They are ignorant of its contents’ と説明して、3幕3場でクローディアスがすぐに用意すると言っている‘your commission’はローゼンクランツとギルデンスターンの任務を記した書類であり、イングランド王に送る親書とは別のもので解釈している。George Lyman Kittredge, ed., *Hamlet* (Boston: Ginn and Company, 1939), 253. この解釈に従えば、イングランド王に宛てた親書への言及が最初に見られるのは、3幕4場のthe ‘engineer’ passageの中ということになる。
- 11) Rosamond Gilderによると、‘Th’associates tend’と言われた時に、ハムレット役のJohn Gielgudは学友二人の方を見て、‘But come, for England!’と言いながら二人に近寄っていくという演技をした。Rosamond Gilder, *John Gielgud's Hamlet: A Record of Performance, with 'The Hamlet Tradition' by John Gielgud* (London: Methuen, 1937), 90. Harley Granville-Barkerはこの場面について、ハムレットは、‘But come, for England!’と言いながら、学友二人についてくるように手招きすると解説している。Harley Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare: Third Series: 'Hamlet'* (London: Sidgwick and Jackson, 1937), 127.
- 12) この台詞の中に‘everything is sealed and done’という表現が出てくるが、これは、親書を含め、渡英に関わる他の必要品はすべて準備ができているという意味であって、クローディアスは、ここで文字通り、親書が封印されているという事実を周りの者に伝えようとしているのではないだろう。いずれにしても、これはハムレットが退場してからの台詞である。
- 13) Horace Howard Furness, ed., *Hamlet*, New Variorum Shakespeare, vol. 1 (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1877), 321.
- 14) Saxo Grammaticus著、*Historiae Danicae*からの引用はOliver Eltonの英訳に拠る。Geoffrey Bullough, ed., *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, vol. 7 (London: Routledge and Kegan Paul, 1973), 66-7.
- 15) Ioppolo, *Revising Shakespeare*, 139-40.
- 16) Q 1 からの引用とscene-line numberingは原則、Kathleen O. Irace, ed., *The First Quarto of Hamlet* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998) に拠る。
- 17) 本論ではあまり触れられなかったが、John Kerriganは、Fではハムレットと学友二人の友情がQ 2 よりも強調されていると指摘して、Fからthe ‘engineer’ passageがカットされているのも、学友二人に対するハムレットの敵対的なスピーチをカットする

ためであると主張している。John Kerrigan, 'Shakespeare as Reviser' in *English Drama to 1710*, ed. Christopher Ricks (New York: Peter Bedrick Books, 1987), 259. 本論で見たように、ハムレットが学友二人に直接、敵対的なスピーチをする場面が3幕4場の前後に散りばめられていた。テキストを見る限り、the 'engineer' passageをカットしても、ハムレットの学友二人に対する敵対的な態度はそれほど和らげられているようには感じられないのではないだろうか。

18) Ioppolo, *Revising Shakespeare*, 139-40.

19) Harold Jenkinsは、劇場において観客はこの問題に気が付かないと指摘している。Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1982), 331. 確かに、クロードias自身がローゼンクランツとギルデンスターンにイングランドへの同行を命じるシーンが3幕3場にあるので、the 'engineer' passageでハムレットがイングランド計画の付随的な情報について話しても、観客はあまり違和感を持たないのかもしれない。また、クロゼット・シーンが比較的長いシーンであり、しかも感情の激しい起伏や亡霊の登場といったエピソードを伴う中身の濃いシーンだけに、観客はクロードiasが親書等の準備をするために必要な時間がすでに十分経過したと錯覚するのかもしれない。

20) Edwards, ed., *Hamlet*, 16. Edwardsは、the 'engineer' passage直後のQ 2/F共通部分に見られる、'This man shall set me packing' という台詞に触れて、Fのハムレットは、ポーロニアスを殺害してしまったことにより、自分をイングランドに早く送り出す絶好の口実をクロードiasに与えてしまったことを認めてはいるが、対抗策については何も語らないと述べている。細かな点だが、この台詞の中のpackという動詞は、急いで去るという意味と同時に、ここではplotと同じ、策略を練るという意味も込められていると多くの注釈者が指摘している。もしこの指摘が正しければ、ハムレットはQ 2/F共通の部分でも、何らかの対抗策を考えなければならなくなると語っていることになる。